

木代修一先生年譜

明治三十一年（一八九八） 誕生

十一月十四日、島根県能義郡母里村（現在伯太町母里）に、父元太郎（元恭）・母たに（西村氏）の長男として生まれる。母里の地は、出雲国風土記の意宇郡母理ノ郷、藩政時代松江松平氏の支藩一万石の藩邑で、伯太川にそい、二百戸ばかりの町家がひっそりとよりそっており、年々目にみえて凋落してゆく斜陽の町だったが、その頃なお士族屋敷や松並木がのこり、季節の祭り、盆行事、歳末の市などもはなやかであった。

同 三十八年（一九〇五） 八 歳

四月、母里村尋常小学校に入学。この年、旅順陥落・日本海海戦、ついで郷村出身兵士の凱旋など日露戦争のことを幼い心に印象す。五・六年の頃、校長高野乗慧先生に担任され、その薫陶をいまでも銘して忘れない。

同 四十四年（一九一一） 十四歳

母理村外三村組合高等小学校（二カ年）へ進学。その間、明治天皇崩御・乃木大将殉死事件などにつよい印象をうける。この頃、徳富蘆花「自然と人生」など愛読。

大正二年（一九一三） 十六歳

三月、同校卒業、明年師範学校への進学を期し、専ら家居自習す。この頃、大町桂月主宰の雑誌「学生」、黒岩涙香主筆の「万朝報」などに親しみ、影響をうける。

同 三年（一九一四） 十七歳

島根県師範学校（松江市）本科第一部に入学。在学四年間を通じ、とくに和田兼三郎先生の薫陶に負うところが多かった。

同 五年（一九一六） 十九歳

四月、修学旅行で始めて東京・京阪の地をふむ。その頃、八木莽三郎「日本考古学」に邂逅、ついで京都大学考古学研究報告などを借読して、考古学に対する興味を触発される。

同 六年（一九一七） 二十歳

八月、日本歴史地理学会米子講演に参加、喜田貞吉博士らの講演と臨地指導をうける。

同 七年（一九一八） 二十一歳

三月、島根県師範学校を卒業、同県安来町小学校に勤務。ついで、大正九年、宇賀荘村小学校に転勤する。その年、京都大学夏期講演会に参加し、矢野仁一教授の最近支那を聴講、また、上醍醐薬師堂・経蔵など京都周辺の史跡・古建築を踏査する。

同 十一年（一九二二） 二十五歳

東京高等師範学校（のち、東京教育大学）文科第一部（歴史・地理学専攻）に入学し上京、晩学のみちをたどり始める。
国史 三宅米吉、東洋史 中山文四郎、西洋史 磯田良・斎藤斐章、地理 山崎直方・辻村太郎・内田寛一・田中啓爾諸先生の指導を受ける。この年、松浦貞子と結婚、郷県大田市在なる累世医家の生まれ。以来内助につとめ、二男四女をあげる。

同 十三年（一九二四） 二十七歳

級友有志と大塚史学会の創立に力をつくす。翌年、考古学会（のち日本考古学会）の学生幹事を嘱せられ、幹事長高橋健自博士のもとで会務の一部を担当する。

同 十五年（一九二六） 二十九歳

三月、東京高等師範学校を卒業、東京女子高等師範学校（のち、お茶の水女子大学）の附属小学校・同高等女学校に勤務

する。この年、中山文四郎先生主幹の歴史教育研究会の同人となり、機関誌「歴史教育」の編刊に参画、以来昭和十九年終刊のときに至る。

昭和三年（一九二八） 三十一歳

一・二月文部省派遣の視察団に加わり、朝鮮・南満州・北中支を旅行。

同 四年（一九二九） 三十二歳

四月、東京文理科大学（初代学長三宅米吉教授）が創設され、その助手に任じられ、三宅・中山両先生のもとで国史学および東洋史学（兼）教室に勤務、研究室創設の実務に従う。この年十一月十一日、三宅学長の急逝にあう。

同 五年（一九三〇） 三十三歳

九月、東京高等師範学校助教授を兼任、国史授業の一部を分担し、爾来累年近畿を主とする史跡史料研究旅行を指導する。この年、松本彦次郎教授、六高から来任し、文理大國史学を主任される。以来提擲をうけること多年。

同 六年（一九三一） 三十四歳

二月、大塚史学会の研究誌「史潮」発刊、当初のプランナーとして編集主務する。

昭和九年（一九三四） 三十七歳

三月、「日本文化史図録」第一刷を四海書房より刊行。

同 十一年（一九三六） 三十九歳

十二月、父郷里に病歿、七十歳。年小漢学詩文を修め、十九歳郷村の役場に入り、のち村長・助役をつとめ勤続三十年におよぶ。かたわら和歌をたしなみ、中央の歌壇にもしばしば名をつらねる。遺著「元恭歌集」ほか。

同 十三年（一九三八） 四十一歳

五月、東京高等師範学校教授に任ぜられる。この年、千住製絨所の囁をうけ、その初代所長井上省三の伝記を執筆刊行す

る。

同 十四年（一九三九） 四十二歳

七・八月、高師文四北滿教育実習班を引率してハルピンの郊外に滞在、ついで満州・朝鮮の史跡を踏査する。

昭和十五年（一九四〇） 四十三歳

国際文化振興会から田沢金吾・田沢担・古川哲史諸氏と欧文版「日本文化史図録」の編集を嘱せられ、会同を重ねること二年余におよんだが、時局急転して出版にいたず。

同 十六年（一九四一） 四十四歳

主任の高師文四（青々会）学級卒業し、同じく文四（暁雲会）学級の主任となる。

同 十七年（一九四二） 四十五歳

四月、駒沢大学講師を嘱せられ、専門部歴史科に日本文化史を講ず。六月、日本諸学振興会歴史部会で「鎌倉時代南都東大寺の学園とその学風」を報告。

同 二十年（一九四五） 四十八歳

五月、小石川大塚の寓居を戦火に焼かれる。七月、長男子しろう郎南方レイテ島の戦線に戦歿す。二十二歳。その前年一月、長女みよ子が面疔に罹り薬剤の払底のためあたら二十歳の青春を散らすなど、身辺の限りなき傷心にあわせ、戦争の非情さを痛感す。

昭和二十三年（一九四八） 五十一歳

八月、桐朋とうほう学園女子部校長を兼務、以後十一年にわたり、東京教育大学の研究協力校としての私学の経営に参画す。のち同校に音楽科（現在、桐朋学園大学音楽部）の創設に与り、いくたの俊才をだす。

同 二十四年（一九四九） 五十二歳

八月、新制の東京教育大学文学部教授となり、日本史学および史学方法論教室に属し、日本史概説・史料講読のほか「奈良時代の社会と文化」「日本金石史研究」などを講ずる。

同 二十八年（一九五三） 五十六歳

東京教育大学大学院文学研究科日本史学専攻の授業担当（日本文化史）を命じられ、「近世知識人社会の研究」「近世画論・画跡の研究」などの講義・演習を行う。五月、母に歿す、八十六歳。生来頑健で日夜労働してうまず、生涯を家事に埋めつくした。

昭和三十二年（一九五八） 六十歳

七月、教大の考古学研究室と長野県屋代町（のち更埴市）教育委員会との共同による同町城の内地区の土師式集落遺跡の発掘調査を指導、以後数年作業を継続する。

同 三十三年（一九五八） 六十一歳

四月、教大文学部史学方法論教室に考古学または民俗学を専攻する学生をはじめ採用し、その運営にあたる。十一月、大塚史学会公開講演「鈴屋学の地方滲透について」。

同 三十五年（一九六〇） 六十三歳

四月、文部省の教材等調査審議委員会委員を嘱せられ、高校芸術科書道指導要領改訂小委員会の会長に選ばれる。東京慈恵会医科大学講師を嘱託、進学課程に日本文化史を講じ、爾来昭和四十九年三月におよぶ。

昭和三十六年（一九六一） 六十四歳

三月、教官定年の内規により、東京教育大学教授の職を辞し、三十二年にわたる母校での講壇生活から離れる。四月、専修大学に招かれ、日本史教授として在職五年、教職課程主任・入試委員長などもつとめる。十一月、論集「日本文化の周辺」（明治書院刊）および私家版「六十年のあゆみ」なり、知己学友からも出版記念会の催しをうける。

同 三十七年（一九六二） 六十五歳

五月、東京文理科大学（旧制）に提出の学位請求論文「平城京の都市生活についての研究」により文学博士の学位をうける。

同 四十年（一九六五） 六十八歳

五月、日本考古学協会総会の記念講演「三宅米吉先生と考古学」。

昭和四十一年（一九六六） 六十九歳

四月、駒沢大学転じ、大学院ならびに文学部教授となる。

同 四十三年（一九六八） 七十一歳

六月、日本古文書学会第一回大会で「本居宣長の書簡」報告。十一月十四日、満七十歳古稀を迎え、学友・受業生による古稀の賀筵に招かれる。

同 四十四年（一九六九） 七十二歳

駒沢大学の刷新委員会委員に選ばれ、教授会新規程案ほか数件を起草し、審議を経てこれを答申採択される。四月、新規程による各学部長の公選が実施され、第一回の文学部長に選出せられる。昭和四十八年三月満期退任。

同 四十七年（一九七二） 七十五歳

駒沢大学主催による海外セミナー・ツアーに参加、はじめてヨーロッパ諸国の視察旅行をする。

昭和四十九年（一九七四） 七十七歳

四月、「日本考古学選集」第一巻「三宅米吉集」（築地書館刊）を編集、解説を執筆する。十月、地方史研究協議会大会の記念講演「近世後期地方知識人層の形成」。

同 五十年（一九七五） 七十八歳

十一月、知友同学の有志により、喜寿の賀筵が催され、「木代修一先生喜寿記念論文集」（雄山閣出版刊）三巻の贈呈をうける。

木代修一先生著作目録

著 書

〔書

名〕

〔発行所〕

〔刊行年月〕

日本文化史図録

東京 四海書房

昭和 九・三

井上省三伝

東京 井上省三記念事業委員会

昭和一三・一〇

城の内——信州千曲河岸における土師式集落遺跡の研究——（岩崎卓也ほか同著）

東京 東京教育大学文学部

昭和三四・三

日本文化の周辺

東京 明治書院

昭和三六・一一

平城京の都市生活についての研究（東京文理科大学提出論文）〔未刊〕

昭和三七・三

田能村竹田「山中人饒舌」訳注（「芸道思想集」所収）

東京 筑摩書房

昭和四六・一

三宅米吉集（「日本考古学選集」第一巻）

東京 筑地書館

昭和四九・三

日本文化人辞典〔監修〕

東京 学習社

昭和二二・七

日本史要説〔編著〕

東京 向上社

昭和二八・四

日本史ノート——日本の社会と文化——

東京 犀書房

昭和三八・五

ある歴史家の手帳——聴秋抄——

東京 雄山閣出版

昭和五一・三

論 文

〔題 目〕

- 平城京都市生活の一考察
- 奈良朝における写経生の生活
- 平城京における工房について
- 近世における武州御嶽御師の生活
- 近世における火誓文書
- 鎌倉時代における東大寺の学園
- 日本美術における郷土的性格
- 江戸時代京洛の文人社会
- 長谷川等伯の画論
- 鎌倉時代南都東大寺の学園とその学風
- 鈴屋の学園とその教育
- 都市としての平城京―その市民の構成と生活―
- 渡辺華山の画論について
- 鈴屋学派の分派と変質
- 本阿弥光悦の芸術について
- 田能村竹田の画論について
- 鈴屋学の地方滲透

〔掲載誌・巻号〕

- | | |
|-------------------|----------|
| 史潮 一年三号 | 昭和 六・一〇 |
| 歴史教育 七卷六・七号 | 同 七・九、一〇 |
| 史潮 四年三号 | 同 九・一一 |
| 史潮 六年三号 | 同 一一・一〇 |
| 歴史教育 一一卷七号 | 同 一一・一〇 |
| 斎藤先生古稀祝賀記念論文集 | 同 一二・二 |
| 歴史教育 一二卷二・三号 | 同 一二・八、九 |
| 史潮 一〇年二号 | 同 一五・七 |
| 歴史教育 一六卷五号 | 同 一六・五 |
| 日本諸学研究報告 一七篇(歴史学) | 同 一七・一二 |
| 桐朋女子学園紀要 一集 | 同 二六・五 |
| 社会科研究 二卷六号 | 同 二七・六 |
| 桐朋女子学園紀要 二集 | 同 二七・六 |
| 史潮 四八号 | 同 二八・三 |
| 桐朋女子学園紀要 三集 | 同 二八・一一 |
| 桐朋女子学園紀要 六集 | 同 三三・一一 |
| 東京教育大学文学部紀要〔史学研究〕 | 同 三四・三 |

近世文人画の展開とその支持層
近世後期地方知識人の形成

駒沢大学文学部紀要 二五号 昭和四二・三
「地方文化の伝統と創造」所収 同 五一・五

説 林

北魏時代芸術としての雲崗石窟の様式について〔東京高師単位報告〕

大正一三・一

飛鳥時代建築の起源を暗示する一資料〔東京高師単位報告〕

同 一四・二

蒙古襲来に関する近時の研究について

歴史教育 一卷一号

同 一五・一〇

長慶天皇御即位に関する研究の推移

歴史教育 一卷二号

同 一五・一二

法隆寺の建築を繞る一二の問題

歴史教育 一卷三号

昭和 二・五

天平期芸術の美術史的意義

歴史教育 二卷四号

同 二・七

桃山時代キリスト教徒の文化活動

歴史教育 二卷一二号

同 三・三

東方のポムペイ

歴史教育 三卷一〇号

同 四・二

東亜における印刷の源流問題

歴史教育 四卷五号

同 四・八

吉利支丹史余影

歴史教育 四卷七・八号

同 四・一〇・一一

天平期彫塑における個性の問題

地理と歴史 六卷一〇・一一

同 一〇・一〇・一一

美術史 — 日本美術史研究の動向 —

歴史教育講座 一二輯

同 一一・五

日本原始芸術

日本文化史大系「原始文化」

同 一三・八

平 城 京

歴史教育 一四卷一一号

同 一五・二

日本民族の構成 — その学史的展望 —

日本歴史 一卷一号

同 二一・五

書芸史の問題 — 常用書を主として —
製作目的からみた書風の成立と変遷

中学教育資料 (文部省) 昭和三一・七
高等学校芸術科書道指導書 (文部省) 同 三三・三

随想・雄記

ノートの中より

雪樹寺の四脚門について、大山寺阿弥陀堂の建築ほか

嫩葉会報 四・五号

大正 九・七、一二

旅信抄

旅順の博物館、北京にて、中央地質調査所、国立博物館ほか
ミル自叙伝における教育的興味

児童教育 二二卷七号
児童教育 二三卷四号

昭和 三・七
同 四・四

学窓随感 — 日本民芸館を観るの記 —

文理科大学新聞六号

同 一二・三

「古活字版の研究」 (川瀬一馬著) を読む

史潮 八年一〇号

同 一二・一〇

古典美を訪ねて — 大和・京洛の古寺巡礼 —

文理科大学新聞一二八号

同 一二・五

鷗外の伝記作品について

研 (こだま) 二

同 二五・一

馬籠 (まごめ) — 藤村記念堂を訪う —

教育大学新聞 二二四号

同 二七・一一

旅三題 — 水郷日田、木曾馬籠、慶州仏国寺 —

教育研究 一〇卷八号

同 三〇・八

三十余年前 — 大正末期の母校寸景 —

教育 八〇三号

同 三一・一〇

私の考古学遍歴

大塚考古 一・二・三号

同 二三・七

三宅先生追憶

三宅米吉先生三十年祭追憶誌

同 三四・一二

書 五 題

書学 一一卷六号

同 三五・六

文人画の精神とその支持者たち

手帳と私

歴史のみかた究めかた

私の一冊の本

桜井忠温さんの「肉戦」のこと

書の芸術性

「おたくさ」とシーボルト

「薩導先生」(アーネスト・サトウ)のこと

近世国学研究の視点

知日家学人の記(その一) — E・S・モースのこと —

知日家学人の記(その二) — E・F・フェノロサのこと —

知日家学人の記(その三) — ブルーノ・タウトのこと —

一期一会(その一—四)

歴史教育 一〇卷一一号

大塚考古 四号

月刊日本史 三〇号

文学散歩通信 六号

良久可記 五号

書友クラブ 六七号

良久可記 一二号

良久可記 一三号

日本思想大系「月報」

良久可記 一四号

良久可記 一五号

良久可記 一六号

良久可記 一九—二三号

昭和三七・一一

同 三八・四

同 四〇・二

同 四一・一二

同 四二・一

同 四三・三

同 四五・九

同 四五・一二

同 四六・二

同 四六・四

同 四六・九

同 四六・一二

同 四七・一二—

四八・一二